寺新報　第3種郵便物認可　第3232号

H28
2016. 4/10

無明の酔ひもやうやうすこしづつさめ、三毒をもすこしづつ好まずして

『親鸞聖人ご消息』より

いのちの栞

愛知・刈谷布教所光照寺
竹本 崇嗣

母の後ろ姿を

近所に本願寺派のお寺がないという方が、隣の市からお参りに来られました。

お話ししていると、「数年前に101歳の母を亡くし、お仏壇で朝夕のおつとめをするようになりました。正直に言いますと、それまでは仏事に関心があったわけではないのです」ということでした。

それでも、いつか引き継がなければと、母の後ろ姿を見ていたそうで、「母と同じように朝夕のおつとめとお給仕を続けてみると、次第に日々の習慣となり、家を空ける時は何となく落ち着かない」と笑われました。

ただ、「母は、いつもお浄土に生まれさせていただくことを喜んでいましたが、自分はそのような気持ちにはまだなれない」「朝夕のおつとめは、自分が引き継がなくてはならないという義務感が強い」「いつか母のように、仏さまにならせていただくことを喜ぶ自分になれるのだろうか」と心配されていました。

この言葉を聞いて、逆に私は、うれしくなりました。おつとめとお給仕を通して、自らと向き合う大切な時間を過ごしておられるのだ、と感じたのです。

変化しながらの中

三毒とは貪欲・瞋恚・愚痴のこと。親鸞聖人のこのお言葉は、「釈尊と阿弥陀仏の巧みな手だてに導かれて、今は阿弥陀仏の本願を聞き始めるようになった」私たちが、「迷い（無明）と、むさぼり（貪欲）・いかり（瞋恚）・おろかさ（愚痴）を少しずつ好まないようになり、阿弥陀仏の薬を常に好むようになって」いく様子を明らかにされています

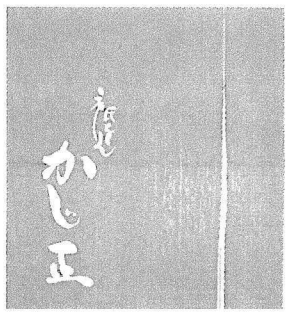
このお言葉をいただく時、大切にしたいのが「すこしづつ」という言葉です。

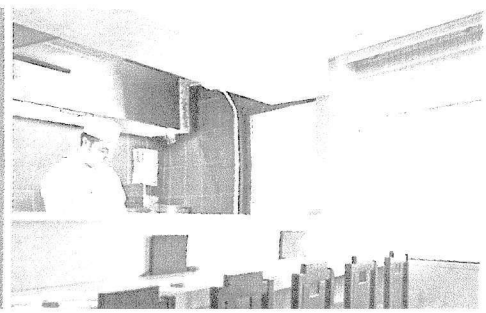
とどまることなく変化し続ける無常の世を、やはり変化しながら生きていかざるを得ない私たちにとって、「変わる」ということは切り離せない現実です。

しかし、その変化は一様のものではなく、コインの表が裏になるようなわかりやすいものもあれば、長い階段を一段ずつ登ったり降ったりするようなわかりにくいものもあるでしょう。

聖人のみ跡を慕うように、ご往生されたお母さまの後ろ姿にならう、おつとめと変化の日々をこれからも重ねていただきたいと念じるご縁でした。

親鸞聖人の師・法然聖人ゆかりの知恩院界隈 その2





「教えたくないけど…」、と前置きして紹介される店やスポット。そんな自分だけの名所は、誰にでもひとつやふたつはあるだろう。

私のような仕事をしていると、よく周りの人から、雑誌には載らない穴場や通が通う店を教えてくれと言われる。そんなとき、私が紹介するのは、教えたくな